

講中お知らせ 十月号

発行人桐本昌吾 / デザイン玉置實 * 記事・画像の copy・download 転載引用等は禁。法華講宝相寺支部「講中お知らせ」編集室 0739-22-2232

○日如上人御指南

我々は邪義邪宗の謗法の害毒によって多くの人が苦しんでいるのを見て、それを黙過せず、一刻も早く大聖人様の正しい教えに導くべく、決然として折伏を行じていくことが、いかに大事であるかを知り、各講中ともいよいよ異体同心・一致団結して、勇猛果敢に折伏を行じていかれますよう心から願います。(大日蓮・令和六年八月号)

○慈悲の心で謗法破折

大聖人様は「法華経のかたき」である謗法を折伏をしなければ、その人自体も仏様の敵となることを示されています。「謗法と申す罪をば、我もしらず人も失(とが)とも思はず。但仏法をならへば貴(たつ)しとのみ 思ひて候」(同書 1258)と謗法罪の恐ろしさを知る私達が、もし世間体を気にしたり、人間関係のトラブル回避を優先するあまり、両親や恩ある人の謗法を放置するならば、私達自身も不知恩の誹りを免れず与同罪になります。但し、「法華経のかたき」と言っても、未入信の人を憎んだり、相手の人格を否定することがあってはいけません。慈悲心をもって謗法を破折し、正法に導くことの大事を大聖人様は教えられているのです。

○使命を自覚し、諸難を乗り越える実践を

私達が相手の幸せを願い、真心込めて折伏しても、難信難解の妙法ですから、折伏相手の方からは反発されることも多くあります。「念仏者・禅宗等を責めて、彼等にあだまれたる、いかなる利益(りやく)かあるや」(開目抄 577)と諸難を忍び折伏に徹する時、真の仏道を成就することができるとの喜びを示され、弟子・檀那の奮起を強く促されます。

総本山第六十七世日頭上人の「広布への前進、これを常に僧も俗も心に体して忘れず、日々夜々(中略)その実行を心にかける処に真の価値ある人生があり、本仏大聖人様が深く御喜びになることが確実であると信じます。」(大白法・平成十五年一月一日号)

○まとめ

「折伏前進の年」も残すところ二カ月あまりとなりました。皆さんは誓願成就に向けてどれだけ具体的に実践できているでしょうか。この十月、十一月には御会式が行われます。御会式で拝聴する『立正安国論』、及び御歴代上人の烈々たる申状の御意を体し、年内には必ず折伏成就できるよう精進してまいりましょう。

令和六年十月度 御報恩御講

弘安元年九月六日 五十七歳

『妙法比丘尼御返事』

仏法の中には仏いまして云はく、法華経のかたきを見て世を

はぶかり恐れて申さずば 釈迦仏の御敵、いかなる智人善人なり

とも必ず無間地獄に墮つべし。譬へば 父母を人の殺さんとせん

を子の身として父母にしらせず、王をあやまち奉らんとする人の

あらむを、臣下の身として知りながら 代をおそれ申さざらんが

ごとしなれど禁められて候。

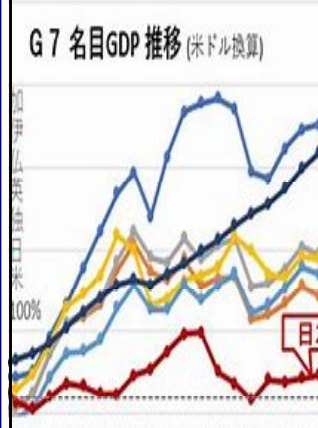
御書二二六二一

【通釈】仏法のなかに仏が誠めて言われるには、法華経の敵を見ながら、世をはばかり恐れて(謗法を)指摘しない人は釈迦仏の御敵となり、いかなる智人、善人であっても、必ず無間地獄に墮ちることになる。譬へば、父母を殺そうとしている者がいることを、子の身として父母に知らせなかったり、王を殺そうとする者がいることを、臣下の身として知りながら代(よ)を恐れて伝えないようなものであると、禁められている。

五濁の時代に

■御法主日如上人令和六年年頭
▼「五濁乱漫(ごじょく-らんまん)とした末法濁悪(じょくあく)の今日、この窮状(きゅうじょう)を救済する方途は、一人でも多くの人々に対して妙法を下種し正法に帰依せしむることである」(大白法第 1116)

新NISA 「すでに」



▼正月は能登の地震に激しくユスられた。八月、日本発の世界同時株安。南海地震臨時情報は夏の悪夢。令和の米騒動とインフレ。政治・経済・官僚も劣化した。何より社会の源である、我ら大和の万民の心身、「世の道義」が衰えた!

大聖人様は「南無妙法蓮華経は大歡喜(だいかんぎ)の中の大歡喜なり」(御義口伝 1801)と仰せである。

我ら法華講は大聖人様の妙法を受持した。よって妙法の大歡喜の中にある。妙法の信仰者は仏力・法力により、無上の幸いの果報にある一人一人である。



見るがいい、ご参集の方々の顔を拝見してみたら良い。お一人お一人、みんな素晴らしい顔をなされている。法華美人のベッピンさん、りりしい男子。頑固一徹の壮年。皆それぞれに、大御本尊様の仏力・法力に包まれて耀いている。信仰の大歡喜に溢れた良い顔でいらっしやる。



▲しかしながら人生、されど人生、落ち込む事は多い。それがこの娑婆世界。仏様はそれを耐え忍ぶ世界、忍土とおっしゃった。

この世界で希有に妙法の菩提心を保って、懸命に我らは生活している。妙法の法灯明を高く掲げる我ら一人一人は、妙法の如来の使である。自己の信心の命を自灯明として、人生を一步一步と前進する。それが信仰者の姿である。荒凡夫の命に巣くう無明の闇を、絶えることなく照らし続けて下さる、仏様の無量の大慈大悲がそこに耀く。それが不可思議妙法であり、仏力・法力である。

大聖人様は「此の妙法蓮華経を信仰し奉る一行に、功德として来たらざる事なく、善根として動かざる事なし」(聖愚問答抄 408)と仰せである。

妙法の信仰は、如何なる功德とも積まれ、いかなる善根ともなる大果報である。湧き出る大歡喜となるのである。

我ら法華講はこの妙法受持の大歡喜に生活している。そして現今、足元の暗いこの日本にいる。

ここに我ら法華講は正法の下種折伏を保って、妙法の篝火(かがりび)を激しくふるうのである。この世の中を各々の妙法の灯りで



「ほんの片隅」を照らすのである。■それが法主猊下の「妙法下種折伏」の御指南である。さなくは、一向にこの末法の時代の暗雲。少しも晴れることは無い。／礼